

世田谷村日記

石山修武

四月二十五日

昨日は世田谷村内で過した。辻邦生の「西行花伝」、池波正太郎「人斬り半次郎」上・下読む。午前中は歩いて五分の世田谷文学館訪問。世田谷に縁の深い文学者達の記録を見る。世田谷村の外の現実にもう1つの世田谷村があったのを実感する。今の中に歴史が在り歴史が連綿と持続しているのを知る。大宅壮一が松沢病院の隣で自給自足の生活を試みていたのも写真で確認した。精神病院の隣地は土地の価格が安かったからだと教えられた。ノンフィクションの人であった。一九五〇年以前の世田谷はまさに村であった。私の世田谷村の一階に残そうとした築五〇年の木造住宅はその名残であった。一部便所だけでも残しておいて良かったと思う。西郷隆盛が薩摩に引き下がって試みようとした学校と農村生活の直観は今再び注視したい。西郷の近代との対面を単なるローカルな保守主義、地域主義の枠内で見えるのには大きな不足がある。西郷はあまりにも芸術家的理想主義者であったという池波正太郎の言にはうなずかされた。今日は九時前に世田谷村を発つ。

二十三時過世田谷村に戻る。今日は夕方東大鈴木博之研究室へ。東大出版会の件最終打合わせ、というよりも又も鈴木さんより発破をかけられにノコノコ出掛けた。しかしながら、夏のロシア行の了解を得る。その後十九時東京駅八重洲口地下街にて結城登美雄と会食。結城氏とロシアの件、東北の件打合わせ。結城は九州

由布院での会合からの帰りでいささか疲れ気味であった。約束通り二〇時頃鈴木氏に電話しようとするも結城も私もケイ帯電話を持たず、公衆電話を探して地下街を駆け廻るも、見当たらず。店の番に公衆電話ありませんかと尋ねてもポカんとされるばかり。ケイ帯を持たぬ人間は明らかに少数派になり、すでに差別されているな。かなりの不都合が発生するようになった。しかし、今更持てるかと居直りたい。

結城氏とロシア・ダーチャワークシヨップは宮沢賢治の農民芸術概論でゆこうかとあいなった。高村光太郎の岩手のバラック農家の事例もあるようで、いくつかの糸口が視えてきた。結城氏はいささか気持良さに酔う。帰りの電車で河出書房新社の「宮本常一」再読。対馬・五島・種子島を語った、あなたの大陸を夢見た島、がやはり圧巻である。もういくら勉強してもとても追いつけるものではないとあきらめるしか無いなこの世界は。何を讀んでも、こんな実感ばかりだな最近。只今、世田谷村二十四時少し前。大変な電車の事故があつたようで、これでは何時何処でどんな目に会うか解らぬ日々になった。不安が日常になったのだ。